

電子書籍元年に考える 「場」としての図書館 —その可能性と課題



私立大学図書館協会
2010年度西地区部会研究会

日時:2010年10月21日(木)
会場:金城学院大学

岡本真 (@arg)

アカデミック・リソース・ガイド株式会社
代表取締役／プロデューサー

自己紹介

私は何者か



自己紹介－岡本真（おかもと・まこと）

経歴

- アカデミック・リソース・ガイド株式会社
 - 代表取締役
 - プロデューサー
 - ACADEMIC RESOURCE GUIDE編集長
 - 国際基督教大学卒業（1997年）
 - 編集者等を経て、
 - 1999年～2009年、ヤフー株式会社に在籍
 - Yahoo!知恵袋、Yahoo!検索ランキング等の企画・設計・運用

兼任

- 京都大学 情報学研究科 非常勤研究員
- 国立情報学研究所 産学連携研究員
- 東京大学 工学系研究科 総合研究機構研究員
- 早稲田大学 ITバイオマイニング研究所 客員研究員
- 大妻女子大学 社会情報学部 非常勤講師
- 関西学院大学 文学部 非常勤講師
- NPO法人横浜コミュニティデザイン・ラボ理事
- L-1 MeeTingメンバー（L-1グランプリ主催者）
- U40 - Future Librarian事務局メンバー
- 全国図書館大会第16分科会主催者
- 任意団体Code4Lib JAPAN準備会事務局長
- NPO法人 横浜コミュニティデザイン・ラボ理事

本日の話の背景

『ブックビジネス2.0』を刊行して



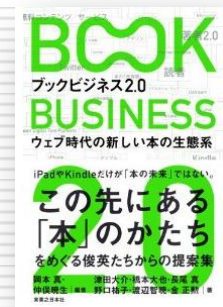
参考：『ブックビジネス2.0』

□ 目次：

- 仲俣暁生「はじめに」
- 津田大介「電子書籍で著者と出版社の関係はどう変わるか」
- 橋本大也「印税90%が可能なエコシステムを」
- 岡本真「未来の図書館のためのグランドデザイン」
- 長尾真「デジタル時代の本・読者・図書館」
- 野口祐子「多様化するコンテンツと著作権・ライセンス」
- 渡辺智暁「ウィキペディアから「出版」を考える」
- 金正勲「「コンテンツ2.0」時代の政策と制度設計」

□ 書誌：

- 実業之日本社、2010年、1995円



私的解題『ブックビジネス2.0』: 岡本真 「未来の図書館のためのグランドデザイン」

- 近代型図書館の変化
 - 収集・分類・保存・提供の先へ
 - 「活用」: ための図書館
- 3レイヤーで考える図書館という存在・機能
 - OS、ミドルウェア、アプリケーション
- 図書館の変容
 - 図書館のバザール化
 - ライブラリアンのプロデューサー化



私的解題『ブックビジネス2.0』：長尾真 「デジタル時代の本・読者・図書館」

- 電子図書館の未来予測
 - 『電子図書館』（1994年初版、2010年復刊）
- 電子化構想の課題
 - デジタル化の障壁、収集の限界、検索の混迷
 - 長尾スキーム
- 知識・情報の行方
 - 出版の未来
 - 書店・古書店
 - 知識インフラの未来

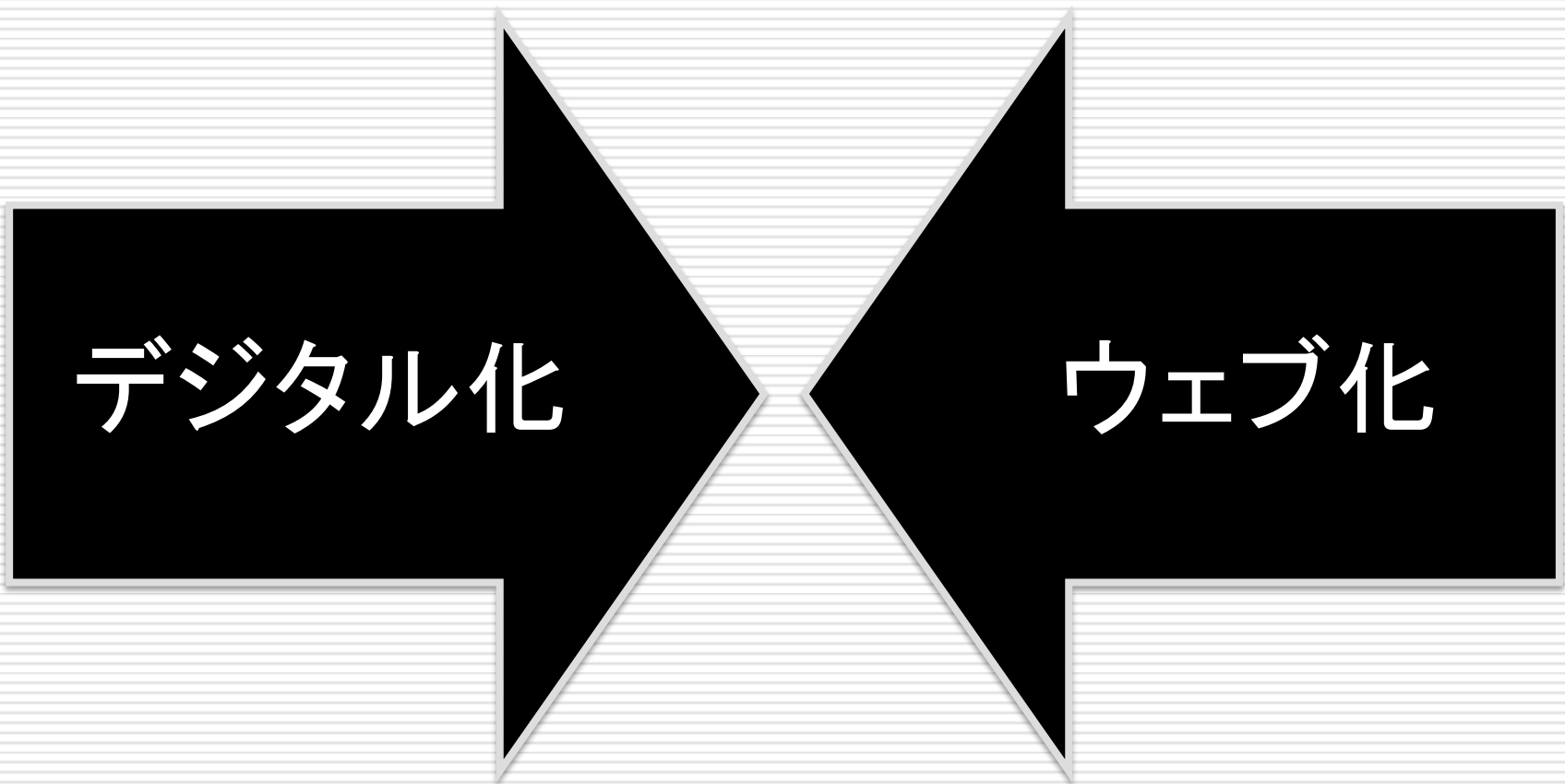


「場」としての図書館

その可能性と課題



情報環境の革命ーデジタルとウェブと



問題意識

—「場」としての図書館を巡る前提

- (1)大規模なデジタル化と(2)大規模なウェブ化の進展によって、私たちを取り巻く情報環境は革命的な変化を経験している。従来、私たちの社会における知識・情報の担い手の一つであった図書館も当然この影響をまぬがれない。
- すでに現実になりつつある事実として、(1)本に象徴される情報・知識の大規模なデジタル化とウェブ化、(2)情報探索・知識発見行動の変化があり、物理的形態を持つ情報・知識(例:本)の集積場としての図書館の役割は早晚終焉する。
- 近い未来に確実に訪れるこの状況に対して、図書館はどのような役割を新たに見出せるのだろうか。あるいは、新たな役割は見出せず、図書館は死滅するのだろうか。

問題意識

—「場」としての図書館を巡る問い

- 主に大学図書館では、(1)機関リポジトリ、(2)ラーニングコモンズという2つの施策を柱に行動するケースが多く見られている。しかし、この2つは本当に大学図書館の新たな可能性となりうるのだろうか。
- 個別の取り組みの是非は別としても、この2つの役割を大学図書館が担うという理由づけが明確になされているだろうか。たとえば、なぜ、図書館がラーニングコモンズを担うのか、学内により適切な担い手は本当にいないのか、という問いに十分に答えられるだろうか。
- 明確な根拠を示せない限り、(1)機関リポジトリも、(2)ラーニングコモンズも大学図書館の生き残り策に過ぎない。であれば、現状は一種のバブルであり、大学図書館の母体である大学としての意義を見出すことはできないのではないか。

問題意識

—「場」としての図書館を考える

- 『ブックビジネス2.0』では、以上の前提を踏まえ、まず図書館の役割分化を主張し、
 1. オペレーティングシステムとしての図書館
 - 国立国会図書館を想定
 2. ミドルウェアとしての図書館
 - 旧帝国大学系列の大学図書館、有力私立大学の大学図書館、都道府県立図書館を想定
 3. アプリケーションとしての図書館
 - 上記以外の大学図書館、市区町村立の公共図書館を想定
- という3つのレイヤーへの転換を描き出した。

問題意識

—「場」としての図書館を考える

- 以上を踏まえ、これからの図書館の役割として、以下の3モデルを提案した。
 1. コンテンツのショーケースとしての図書館
 - 従来の本や雑誌はもとより、デジタル媒体を含めたすべての情報・知識を収集するとともに、無償での貸出に加えて、有償での販売を担う図書館
 2. 人々のマッチングプレイスとしての図書館
 - 利用者一人ひとりを何らかの分野の専門家とみなし、これらの利用者同士が出会い、コラボレーションへと発展する仕掛けを提供していく図書館
 3. ライセンスコントローラーとしての図書館
 - 図書館が無料で提供しているコンテンツや機能を利用して、利用者が生み出した新たな情報・知識の二次利用について、再利用を促進する図書館
- これらのモデルが果たして、大学図書館において可能なのか、あるいは別のモデルが成り立ちうるのか、この点を考えたい。

ご清聴に感謝、質問はお気軽に



岡本真

アカデミック・リソース・ガイド株式会社
代表取締役／プロデューサー

私立大学図書館協会2010年度
西地区部会研究会

汗をかく図書館(図書館騒動記)

—利用者とともにあゆむために—

別府大学 石井保廣

はじめに

—利用促進の壁: 厳しい現実との直面—

- Over the Rank C の蔵書冊数
- Wakeup! スタッフ 5名+One
- 急降下の予算状況
- キリンの首と象の鼻

2

目次

—物・金なしされど人あり—

- 資金調達大作戦
- 学生を惹きつける
 - 一人1万円の買い物ツアー
 - シラバス記載参考図書
 - 朝一朝活運動
 - 時々の歳時記
 - 利用者の声 意見箱
- オープンキャンパス騒動記
- スタッフを強力にかバー FOBUL
- 展望と課題

3

資金調達大作戦

—外部資金と学内資金—

- 外部資金
 - 田嶋記念大学図書館振興財団
 - 総合目録データベース遡及入力事業(事業A)
 - 次世代学術コンテンツ基盤共同構築事業(CSI)
(領域2) H20-21年度、(領域1) H22-24年度
- 学内資金
 - 図書充実費(学長裁量経費)

4

学生を惹きつける(その1)

—選書ツアー—

選書ツアー	2009年度		2010年度	
	K書店	J書店	K書店	J書店
人数	12	16	17	18
冊数	64	85	69	68
平均冊数	5.3	5.3	4	3.7
金額/人	10,370	11,820	7,310	9,483

5

学生を惹きつける(その2)

—シラバス記載参考図書—

シラバス	2009年度			2010年度
	既所蔵	適用外	購入	購入
大学	321	58	177	201
短期大学部	113	70	144	
合計	434	128	321	201

6

学生を惹きつける(その3)

—朝一朝活運動—



- 「朝一朝活」ができるまで
 - 開館時間延長の希望多
 - 夜間利用者の数
 - 閉門時間
 - 危機管理
 - 朝1時間の予習活動

	26(月)	27(火)	28(水)	29(木)	30(金)	2(月)	3(火)	4(水)	5(木)	6(金)
学生	10	13	18	20	20	未調	24	28	38	37
教職員	2	1	1	1	0	未調	1	0	1	2

7

学生を惹きつける(その4)

—時々の歳時記—

- 箱物がだめなら・・・
- ラーニング・commonsだけがなぜ流行る
- アイディアで勝負!
- アメニティ空間を目指して
- 利用者参加型図書館

8

学生を惹きつける(その5)

—利用者の声—

- 昨年まで眠っていた意見箱
- ガンバッテます! 採用2年目の担当者
- 常連者の扱い → やはり大事なお客様

9

『見た 知った 聞いた』

—オープンキャンパス in 図書館2009&2010—

- お茶しません
- 貴重書? 高校生にわかるかな・・・
- 学生が作った絵本展示
- マンガ展示はうけるでしょ!
- ビデオ鑑賞
- 雑誌・しおり配布(しっかり図書館宣伝も)
- 選書ツアースナップ写真で惹きつける

10

FOBUL

— スタッフを強かにカバー —

FOBUL (Friend of Beppu University Library)

別府大学文化会に所属する公認のサークル
主な活動は、ボランティアとして附属図書館の
様々なサービスを援助することの他、県内公共図書
館の見学やサーチャー(情報検索技術者)資格取
得を目指した勉強会なども行う。
組織成立: 1994年ごろ
構成人員: 20数名
主な作業: 排架、装備、目録登録、イベント協力など

11

滞在型図書館の光と影

—課題と展望—

- 自前の事業で思わぬ出費 —選書ツアー—
- 仕事が増えたが・・・ —指導と交換日記—
- 図書館活用講座 → 導入授業
- 電子書籍と仲良くなれるか —私見ですが—
- 品揃えは? —うちのウリはマンガや絵本—
- 打ち寄せる波 —図書館合理化の大合唱—

12

『地域共創型』図書館絵本ミュージアムの構築

中国学園図書館 荒木満子

中国学園は、小規模私立大学ながら短期大学5学科、4年生大学2学部2学科と総合大学的性格を持つ。と同時に、短期大学部の保育学科をはじめとして、子どもに関わる研究と教育に伝統を持ち、平成18年度に4年生大学の子ども学部が加わったことで特色を強めている。

本学図書館は、学園全体の特色を生かし、研究と教育を支援し、地域社会に開かれた図書館としての姿勢を力強く示す方法を模索してきた。図書館が情報発信する中で『地域共創型』図書館絵本ミュージアムの構想は、学生を中心とした大学運営を目指す本学の基本方針に立ち、大学図書館を地域と共創する学園生活のアメニティーセンターとして捉え直すところから生まれたものである。

また、私立大学等経常費補助金特別補助（平成20年度教育・学習方法等改善支援）に「地域共創型絵本ミュージアム」の構築が採択された。平成18年度から取り組んだこの構想は、学生図書委員会の活動も含めて、学生のニーズに合った特色ある蔵書構築をすすめ、学生と教員だけでなく、地域に積極的に公開し、学内外の強い支持を得た。この取組を一層推進し、学園全体と地域社会にこれを定着させたい。

本学の学生は、自らの活動をとおして学ぶことを好む傾向にあり、イベント等への参画の呼びかけは主体的学習支援に効果的である。加えて大学図書館をキャンパスアメニティーの中核施設としての図書館へとイメージを転換することに有効である。

以上のような、趣旨・目的をもって、構想・構築した。

平成20年度から3年間のあゆみと今後の課題について報告する。

「利用者の求める図書館サービスに向けて」

名古屋外国語大学・名古屋学芸大学図書館 中嶋 優

2009年7月に行ったガイダンスにおいてアンケートを実施した。アンケートの内、図書館利用に関する項目を確認したところ、本学図書館を利用したことがないという意見が多数、寄せられていた。主な理由としては、図書館に関心がない、利用の仕方・資料の探し方が分からないなどが挙げられる。

本研究では、上記理由の改善として、これまでの図書館サービスの見直しと2009年度に本学で実施した活動について紹介する。

まずは、2005年度～2009年度の本学図書館統計から、これまでの図書館サービスを見直す。蔵書冊数や所蔵雑誌タイトル数、提供するデータベースの種類は増加し、利用者への資料提供は年々向上している。それに伴い、図書館利用状況も所属別で分析したところ、どの所属でも新学科開設等の影響のない2007年度～2009年度はほぼ増加傾向にある。

次に、本学の活動については、ToshoRing サポーターとパスファインダーを紹介する。まず、ToshoRing とは愛知県立大学、愛知県立芸術大学、愛知淑徳大学、名古屋外国語大学、名古屋学芸大学の5大学で共同の蔵書を構築し、運用するネットワークシステムである。サポーターは、ポスターやチラシ作成をはじめ、ToshoRing を紹介する様々な活動を行った。パスファインダーは、レファレンスで受けた質問内容の内、本学の学部構成から考えて、需要があるテーマ「養護教諭」「少年犯罪」について作成した。

以上、2つの活動において、微力ながら、図書館サービスの向上のために取り組むことができた。しかしこれら2つの活動は、今後も継続していくことができるのかという課題が残る。

「大学図書館における利用者サービス構想の変遷」

佛教大学図書館 福井 京子

図書館は情報のデジタル化の進化、情報のネットワーク流通により、教育・研究環境に大きな変化をもたらしている。そして、インターネットや検索エンジンの導入の以前、以後を比べると学生の情報探索行動の変容が認められる。このような変容に対して、大学図書館は新たな対応が必要となる。

1、図書館利用教育

大学図書館における、図書館利用教育は、方法として、3つの類型¹に分けることができる。

- (1) 学科関連指導——図書館が企画、実施する講習会が主であり、講義、実演、演習などの形式で指導がなされる。
- (2) 学科統合指導——とくに医学系図書館などで従来から実施されてきた、授業科目(カリキュラム)の内容(目標)の中に文献の探索法などを組み込んだ方式である。
- (3) 独立科目方式——例えば「情報リテラシー」や「文献探索法」などといった授業科目を設定し、図書館情報学担当教員などが指導を行う方式である。

これらの相互関係を考える。

2、図書館と情報処理センター(計算機センター)の統合、融合から研究開発室の設置へ

この背景には、媒体型資料(コレクション所蔵)から媒体型資料+情報アクセスへの変化があげられる。また、社会は、情報化社会から知識基盤社会への変容を望んできた。しかし、現実はあるような成果をあげていないように思われる。

3、レファレンスサービスの深化を求めて

この議論は図書館員の専門性とも関連するが、私学における職員の異動、また、図書館業務の委託の進行などに関わっている。必ずしも一義的にはいえない。

4、滞在場所としての“図書館”ラーニングコモンズへの関心・提案へ

現在、共同学習環境の“場”としての図書館機能が充実している例が増えてきているが、柔軟な学習環境として提供するのであれば、情報アクセスや、レファレンス・サポート体制の充実が必要となろう。

5、佛教大学図書館の将来へ

大学の社会的立場の再確認と図書館使命の共有の再認識が求められる。また、設置母体と附置機関としての図書館の役割の整合性を考えることも必要である。その前提として図書館が確固たる者として位置づけられる教育(授業)が求められよう。

¹ 日本図書館協会図書館ハンドブック編集委員会編『図書館ハンドブック第6版補訂版』2010,p.95

「場の提供から人的サービスの充実へ ―愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センターの取組み―」

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター 富田 一文

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター(以下「当センター」)では、平成21年10月に耐震・リニューアル工事が完成し、2階フロアのみ135席であった閲覧席が、1階にも増設され、2階と合わせて182席に増設された。

1階をラーニングコモンズ風の学習用閲覧室とし、2階を研究用閲覧室として、医療系図書館機能を集中させ、快適な学習環境を整え、滞在型図書館としての場の提供機能を整えてきた。

場の提供が整備できたことにより、当センターでは、今後人的サービスの一層の向上に努めるために平成21年度を初年度とする3年間の中期計画を策定し、「教育課程に準拠した情報提供の拡充」を求めて各年度の目標を定めた。

今年度(平成22年度)は、6年生薬学部の完成に備えて、歯学部・短期大学部も含む「学士課程向けサービスの充実」に努めるようにしている。現在、取り組んでいる主な事例を挙げれば、昨年専任職員で実施している、大学院特別講義を、平成22年度は、歯学研究科で5回、薬科学研究科で1回実施した。内容は、「論文を書くため」の基礎となるデータベースや文献支援ソフト等の講義・実習である。当センターでは、閲覧部門を情報提供サービスとして、委託している。専任職員と委託スタッフが連携・協力をして行うサービスとして、春学期に図書館利用のガイダンスを今年度は、学部生・大学院生に向けて15回行った。今まで、取り組んできたサービスを今後も継続して行い、専任職員・委託スタッフと意識や知識の共有、経験の蓄積を図っている。今後、新しく取り組む事例として、秋学期に大学生に向けた2次資料の使い方を知るための講習を予定している。

また、より高次のレファレンス質問を誘発し、そのレファレンスに対応することで専任職員・委託スタッフが、お互いの雇用形態の違いを超えて知識とサービスの向上を図る取り組みを実施したいと考えている。